

HIV 及び結核のための多言語通訳の育成とその普及に関する検討第 3 報

「外国人に対する HIV 検査と医療サービスへのアクセス向上に関する研究」班

研究分担者 沢田 貴志 神奈川県勤労者医療生活協同組合港町診療所所長
宮首 弘子 杏林大学外国語学部教授
研究代表者 北島 勉 杏林大学総合政策学部教授

研究要旨

エイズ動向委員会によれば近年外国人の HIV 陽性報告が急増している。その出身国は東アジアや近隣諸国の増加が目立つが、必要な言語が多様化しており、通訳の確保に困難が生じている。一方、結核についても外国人の報告が急増しており、出身地には重複がみられる。そこで、当研究班では HIV と結核双方に対応する通訳の育成を 2016 年度から行っている。初年度は医療通訳の活用が進んでいる神奈川県の医療通訳を対象に研修を行うことでカリキュラムを作成し、2017 年度より、東日本の自治体で国際交流協会や NPO などに所属して医療現場の通訳を担っているボランティア通訳者等を対象に結核と HIV に対応した医療通訳の育成研修を行った。今回はその 2 年目であり、参加者のプロフィールと研修の効果について検討を行った。

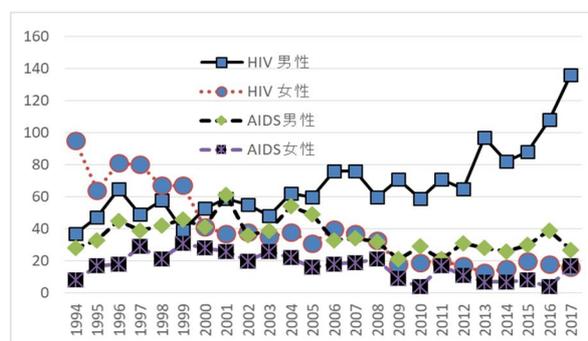
研修参加者は 34 人、日本出身者と外国出身者の両者が含まれる。女性、大卒以上の学歴が多く、年齢は 20 代から 60 代まで多様であった。対応する言語は中国語・英語の人数が多く、他に少人数ずつネパール語、ベトナム語、スペイン語・ポルトガル語・韓国語・インドネシア語の 6 言語の参加者があった。研修効果については、研修前には 10 問中 7 問で正答率が 6 割を切っていたものが、研修後には 9 問で正答率が 8 割を超え、平均正答率が 55.6% から、86.7% と上昇した。また、認識・行動意志についても全ての設問で改善が見られた。参加者の中からは、セクシャリティの講義が含まれていたことへの肯定的なコメントが目立った。

研修には、英語・中国語の参加者が多かった一方で、現在必要性が高まっているベトナム語などのアジア言語の参加者数は少数であり今後の通訳人材の確保をする上での課題である。一方、研修参加者が結核及び HIV の通訳を依頼をされることが増えており今後の活動についての観察も必要である。

A . 研究目的

エイズ動向委員会によれば、この数年、外国人男性の HIV 陽性報告が急増している¹⁾。また、先行研究によれば、拠点病院を訪れる HIV 陽性者の使用する言葉が多様化しており、更に日本語英語ともに不自由な外国人の検査・医療アクセスが遅れていることが示されている²⁾。2012 年以降、外国生まれの結核報告も急増しており、その国籍の内訳はアジアの多様な国である。

図 1 . 国籍別 HIV ・ AIDS の動向



厚生労働省エイズ動向委員会 2017 年報告より

多様な国籍の結核患者の増加の背景には技能実習生、留学生（特に日本語学校生）などの増加がある。今後の新たな外国人材の受け入れ拡大に伴い、結核とともに HIV も在日外国人の間で増加をすることが予測される。2000 年代半ばまでは日本で登録される外国人の HIV 陽性者はタイ・ブラジルなどの特定の国の出身者が大半であった³⁾⁴⁾。しかしながら、2014 年の調査での出身国の分析からは日本で HIV 陽性が解る外国人の出身国が多様化し、その結果必要な言語も多言語化してきていることが示されている⁵⁾。

既に結核に対しては東京都・大阪府などが通訳派遣体制を構築している⁶⁾。近年日本で HIV 陽性が分かる外国人が多い国と結核患者の出身国が類似する傾向にあり、当研究班では、結核と HIV 双方に対応する通訳を育成し運用することの実用性について検討を行ってきた。

2016 年度は、自治体による医療通訳制度が既に 10 年以上運用されている神奈川県で HIV と結核に対応する医療通訳のための研修を実施し、研修の効果が認められ人材の確保も可能であることを確認した。2017 年度と 2018 年度については、この経験を基に対象地を東日本の自治体に広げて研修を行った。

B．研究方法

昨年神奈川県で実施した HIV・結核のための医療通訳研修を基に、東日本の自治体や国際交流協会から医療分野の通訳派遣の依頼を受けている多言語の医療通訳を対象に研修を実施した。

全国医療通訳者協会や MIC かながわの協力を得て、医療機関への通訳派遣の経験がある国際交流協会や NPO に連絡し、参加者の募集を行った。研修の内容を表 1 に示す。

研修は第一回を結核・HIV・保健所業務などに関する知識の取得を主要な目的とし、座学にて研修を行った。第二回を通訳技術の習得を主な目的とし、ロールプレイを交えた参加型の研修とした。

表 1．感染症通訳研修の内容

結核の基礎知識（疫学・診断・治療など）
HIV の基礎知識（疫学・診断・治療など）
HIV とセクシャリティについて
保健所業務とエイズ・結核の支援
医療通訳ルール
通訳技術の実際
ロールプレイによる実技演習

本研究では、このうち知識の習得を目指した第一回研修によって、結核・HIV についての知識や望ましい認識がどの程度定着したかについて検討を行った。

研修に参加した 36 人のうち、開始時から出席していた 34 人に対して、無記名の自記式質問票調査を研修の前に配布した。また、途中帰宅した一人を除く 33 人には研修終了後にも同様の調査を行い、両者の比較を行った。調査内容は、参加者のプロフィール、HIV への知識、結核の知識、HIV や結核への態度についてであり、研修の前後でそれぞれの回答を比較した。調査・分析への協力に同意が得られた 34 人の回答について解析をした。

（倫理面への配慮）

調査の参加は任意であることを質問票に記載し、参加を希望しない場合はその旨記載する欄をもうけることで調査参加の同意を得た。

C．研究結果

1. 研修参加者のプロフィール

8 言語 34 人の研修参加者のプロフィールを以下に示す。

表 2．研修参加者：担当言語毎の人数

担当言語	人数	担当言語	人数
英語	12	スペイン語	2
中国語	12	ポルトガル語	1
ネパール語	3	韓国語	1
ベトナム語	2	インドネシア語	1

研修参加者は、女性が 26 人と全体の 76.5%を占め、日本出身者が 20 人と全体の 58.8%であった。年齢は 20 台から 60 歳以上と幅広く分布していた。

表 3 . 通訳研修参加者のプロフィール

		人数	%
性別	女	26	76.5
	男	8	23.5
生育地	主に日本	20	58.8
	主に外国	14	41.2
年齢	20-29	8	23.5
	30-39	4	11.8
	40-49	8	23.5
	50-59	5	14.7
	60-	9	26.5
学歴	高卒	4	11.8
	大卒	22	64.7
	大学院卒	6	17.6
	その他	2	5.9

最終学歴は大卒 22 人(64.7%)と大学院卒 6(17.6%)人で大半を占めた。その他は、専門学校などである。

表 4 . 参加者の医療通訳経験

		人数	%
活動期間	なし	18	52.9
	1年~5年未満	13	38.2
	5年以上	2	5.9
	不明	1	2.9
結核通訳経験	あり	6	17.6
	なし	28	82.4
HIV 通訳経験	あり	3	8.8
	なし	31	91.2
研修歴	あり	20	58.8
	なし	14	41.2

過去の医療通訳経験は、「経験なし」18 人「経験 5 年未満」13 人「経験 5 年以上」2 人であり、今回は初心者の参加が多かった。今回は現場で通訳を依頼されている少数言語の通訳者にも積極的に参加を呼び掛けたこともあり、既に結核の通訳を経験したことのある参加者が 6 人、HIV の通訳を経験した参加者 3 人が含まれていた。参加者の

うち 20 人と約 6 割が過去に何らかの通訳研修受講した経験があった。

2 . 結核と HIV に対する知識と研修の効果

結核と HIV に関わる通訳を行う上で特に重要となる知識が研修によってどの程度習得されているかを評価するために、研修の前後での正答率の比較を行った。

表 5 . 結核・HIV の知識

	研修前		研修後	
	正答数	(率)	正答数	(率)
結核				
標準治療の薬剤数	13	38.2	28	84.8
感染性のある結核	23	67.6	27	81.8
特徴的な症状	20	58.8	25	75.8
主な副作用の知識	18	52.9	29	87.9
診断に有用な検査	17	50.0	29	87.9
HIV				
HIV の感染経路	31	91.2	30	90.9
AIDS と CD4 値	13	38.2	30	90.9
主な日和見感染症	20	58.8	29	87.9
HAART の薬剤数	13	38.2	27	81.8
HIV の治療予後	21	61.8	32	97.0

研修の前後で、全設問の平均正答率が 55.6%から 86.7%へと上昇し、研修終了後の正答率は一問を除いて 80%を越えた。正答率が 80%に満たなかった設問は、結核の特徴的でない症状について尋ねるものであった。このため、結核の特徴的な症状を複数回答するなど設問の意図を誤解したために誤答となった回答が少なからず含まれていた。以上より全体的に知識の習得がかなりできていると考えられた。

研修後の正答率が 7 割を下回った回答者は 3 人のみであったが、いずれも外国出身で通訳経験が 1 年未満であった。

3 . HIV・結核への認識・行動意志に関する設問

結核や HIV に対して恐怖心や否定的な感情がないか、結核患者・エイズ患者へ支持的な態度を持っているかどうかに関係する質問を行い、研修の前後での比較をした、

表6 . 結核・HIVへの認識・行動意志

	前	後
結核はとても怖い病気	9	0
AIDSのことを友人とよく話せる	8	14
咳や痰が続いたら受診を勧める	20	25
同僚がエイズで服薬でも不安ない	5	15
結核の友人きっと通訳してあげる	12	21
エイズに通訳依頼きっと引受ける	10	19

結核・HIVいずれに対しても、望ましくない認識や・行動意志が減少し、望ましい認識や行動医師が増加しているのがみられた。特に、「結核をととても怖い病気」とする回答者も、「エイズのことを友人とあまり話したくない」とする回答者もいなくなった。

また、研修終了後は、33人中31人が結核・HIVいずれも通訳依頼に対して「多分引き受ける」「きっと引き受ける」のいずれかの行動意志を示すようになった。

研修への感想の中では、カリキュラムにセクシヤリティに関する講義が含まれていたことに対する肯定的なコメントも目立った。

D . 考察

昨年に引き続き東日本で医療分野の通訳派遣を行っている国際交流協会やNPOに情報提供を行い研修参加者の募集を行った。参加資格として「保健所などから外国人の感染症患者（結核とエイズ）を支援するための通訳の依頼を受ける可能性がある団体職員やボランティアスタッフ」が対象であることを記載したため、英語・中国語の研修参加者が多数得られる中で、アジアの諸言語話者の参加者は限定的であった。

近年の技能実習生や日本語学校生の増加を受けてベトナム・ネパール・ミャンマー・インドネシアなどの出身者の人口が急増している⁷⁾。こうした中で、HIVや結核の診療場面でもこれらの言語の依頼が増えており人材確保が急務である。今回、英語や中国語に比べてこれらの言語の通訳者の研修参加が少なかったことにも人材確保の難しさが表れている。とはいえ、都内の日本語学校生の中で人口が多いベトナム語とネパール語の

通訳者の募集に力を入れて行ったところこの2言語で合計5人の参加者が得られた。いずれもNPOなどで既に医療現場の通訳経験がある人材であり、一般的な医療通訳の経験者に感染症の研修を行うことで人材を育成する方策が実効性があると考えられた。

研修後の正答率は86.7%と大きく改善し、認識や行動意志も望ましい変化が示されており、研修の効果は十分であると考えられた。

しかし、研修参加後にも正答率が7割に達していない参加者が3名あり、いずれも生育地が主に外国であるとの回答であった。日本語が母語でない参加者に対して分かりやすい講義内容とする十分な配慮が必要であると考えられた。また、研修参加前に日本語能力の確認をしたり、派遣前に理解状況をチェックするなどの方策も検討が必要である。

E . 結論

結核やHIVについての通訳を依頼される可能性のある団体職員やボランティアスタッフに対して、結核とHIVの知識を獲得するための研修を行った。多数の英語・中国語通訳の参加が得られた一方で、少人数ながら他の6言語の通訳者の参加が得られた。研修の効果は全体的に良好であったが、少人数ながら研修効果の不十分な参加者もあり、研修参加者の言語能力を確認し、日本語が母語でない参加者にも理解しやすい講義方法について更に工夫を重ねることが必要である。

参考文献

- 1) 厚生労働省エイズ動向委員会・平成29年エイズ動向委員会年報, 2018
- 2) 沢田貴志, 仲尾唯治, 他・エイズ拠点病院を受診した外国人の初診時CD4に影響を与える要因の調査. 「外国人におけるエイズ予防指針の実効性を高めるための方策に関する研究」平成26年度総括・分担研究報告書・21-36, 2015
- 3) 沢田貴志, 奥村順子, 若井晋. 2001HIV感染症対

策ストラテジー 外国人医療の問題点. 総合臨床
50:2781-2784.2001

4) 沢田貴志, 奥村順子, 若井晋. 在日外国人 HIV 診
療についての研究. 厚生労働科研費 HIV 感染症の
医療体制に関する研究班総合研究報告書. 183-
186, 2003

5) 沢田貴志, 山本裕子, 樽井正義, 仲尾唯治: エイ
ズ診療拠点病院全国調査から見た外国人の受療
動向と診療体制に関する検討. 日本エイズ学会誌
18:230-239, 2016

6) 沢田貴志, 山本裕子, 草深明子, 勝目亜紀子 .
外国人の結核への新たな取り組みとしての通訳
派遣制度 . 結核 . 87:370-372, 2012

7) 法務省入国管理局: 在留外国人統計-2017 年 12
月. 2018 年

www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html

F . 健康危険情報

なし

G . 研究発表

1 . 研究分担者

(口頭発表)

1) 沢田貴志, Shakya P, 宮首弘子, 北島勉. 結核と
HIV の動向との関連で見た日本語学校留学生の
属性の変化. 日本国際保健医療学会学術集会.
東京:2018

(論文)

1) 沢田貴志. 在留外国人の医療を取り巻く課題と今
後の展望. 公衆衛生 83: in print; 2019

2) 沢田貴志. 在留外国人の健康支援がなぜ重要か.
保健師ジャーナル 75:13-18; 2019

3) 沢田貴志. 社会的な困難を抱えた外国人小児
と支援. 小児科診療 82: in print; 2019

4) 沢田貴志. 外国人医療の整備はまず地域に住む
外国人のために. 医事新報 4933:10-11; 2018

5) Yasukawa K, Sawada T, Hashimoto H, Jimba M.
Health-care disparities for foreign

residents in Japan. Lancet 393:873-874; 2019

H . 知的財産権の出願・登録状況

なし

1. 特許取得
なし

2. 実用新案登録
なし

3. その他
なし